

啓蒙とヘーゲル美学講義 ——〈モデルネ(die Moderne)〉を手がかりにして

笠原 賢介
Kensuke Kasahara

一 はじめに

本研究プロジェクトの目的の一つに、ヘーゲルの美学講義を 19 世紀初頭のヨーロッパにおける近代的な美術館形成の歴史と重ね合わせることで、啓蒙以降の「芸術」概念の成立に果たしたヘーゲル美学の役割を明らかにすることがある。報告者は、この主旨をふまえて、啓蒙とヘーゲルの関係を照射する手がかり提供すべく、本科学研究費による研究会において次の研究発表を行った。

- (1) ヘーゲルとドイツ啓蒙——美学をめぐる思索と体験の解明に向けて——(2014 年 11 月 29 日(土) 法政大学市ヶ谷キャンパス)。
- (2) ドイツにおける啓蒙研究——ヘーゲル美学講義との関連を考慮しつつ——(2015 年 2 月 26 日(木) 法政大学市ヶ谷キャンパス)。
- (3) A. Gethmann-Siebert のヘーゲル美学論——Danto und Hegel zum Ende der Kunst -Ein Wettstreit um die Modernität der Kunst und Kunsttheorie (2013)をめぐる(2016 年 9 月 24 日(土) 法政大学市ヶ谷キャンパス)。

以下、その内容を討議の結果を踏まえて整理して報告する。

二 啓蒙とヘーゲル

発表(1)と(2)においては、啓蒙はいかなるものであるのかを、ヘーゲルとの関係を念頭に置きながら、ドイツ啓蒙研究の現況をふまえて、提示し、整理することが行なわれた。その際に、三つの位相を区別する必要があることを指摘した。(a)ヘーゲルの啓蒙理解、(b)ヘーゲル研究者の啓蒙理解、(c)啓蒙研究の現段階における啓蒙理解。——これらを総合して、啓蒙とヘーゲルないしヘーゲル美学と啓蒙との関係を問うことが求められる。(1)と(2)においては、(b)を出発点に置き、(c)を示しながら(b)と(a)に対して問題提起を行った。

報告者は、ヘーゲル研究者が啓蒙を〈有用性〉と〈社会改革〉への志向、〈宗教の合理化〉、それと表裏一体の〈歴史的伝承への批判〉、〈常識〉の強調として特徴づけた事例を論評したことがあるⁱ。啓蒙は〈常識〉と抵触しない〈合理性〉の強調であり、そのような観点から〈非合理〉な歴史的伝承が批判される。またこの〈合理性〉は〈有用性〉を指向するものであり、〈合理性〉の普及によって社会はより良い方向に向かうであろう、というのである。こうした把握は、啓蒙の概括的な特徴づけとして一定の妥当性を持つが、啓蒙の時代の個々の思想家・文学者の営みをそれに還元するならばまったくの誤りとなる。啓蒙(Aufklärung, Les lumières, Enlightenment)は、17 世紀末から 18 世紀にかけて起こった汎ヨーロッパ的な思想運動であり、そこには哲学のみならず文学、批評、美学的議論、社会思想など広範な内容が含まれ、地域間の相互交流のなかで多様な展開がおこなわれた。啓蒙の時間的、空間的、内容的なひろがり、さらには、個々の哲学者、思想家、文学者の固有なあり方にも注意を払った考察が求められるのである。ドイツにおける啓蒙に関しては、①トマージウスに代表される 1680 年～1720 年まで、②クリスティアン・ヴォルフに代表される 1720～40 年まで、③ヴォルテールの影響が強まる 1740～50 年初めまで、④カントの批判哲学を頂点とする 1750 年代以降に分けることができる。1750 年代以降、

啓蒙は自己批評的な〈啓蒙の啓蒙 (Aufklärung der Aufklärung)〉の段階に入り、理性だけでなく感情や感覚への関心も高まるⁱⁱ。さらに挙げられていた特徴のうちの〈有用性〉は、②のヴォルフに当てはまるものである。

これら四つの時期は、区別されながらも、相前後して重なり合っている。ベルリン啓蒙を代表するフリードリヒ・ニコライ(1733～1811 年)は、活動の時期は④であるが、その内容は、②のヴォルフの合理主義を引き継いだ平板な〈有用性〉や〈常識〉の強調である。だが、④の時期を代表するレッシング(1729～81 年)は、その思考においても、演劇論においてもヴォルフの合理主義を批判する位置にあり、批評や劇作を通して、当時の〈啓蒙〉された読者の〈常識〉を揺さぶる問いかけを行なったのであった。初期の『カルダーヌス弁護』(1754 年)、中期の『ハンプブルク演劇論』(1767～69 年)、晩年の『賢者ナータン』(1779 年)がその例であるⁱⁱⁱ。

レッシングが〈歴史的伝承への批判〉を重視したことは言うまでもない。このことは、ピエール・ペール『歴史批評辞典』(1696 年初版)の影響を受けた『カルダーヌス弁護』やライマルス(1694～1768 年)の聖書批判の遺稿の刊行などによっても裏付けられる。だがレッシングにおいて、〈歴史的伝承への批判〉は、歴史の否定を意味しない。言い換えれば〈歴史的伝承への批判〉は、歴史を〈合理性〉に解消することではない。ライマルスの遺稿を刊行した際に付した「編集者の反論」(1777 年)で述べられた聖書の「文字」と「精神」の峻別に示されるように、「文字」(歴史的伝承)への批判は「文字」に先立って存在した〈行為〉や〈出来事〉(歴史=Geschichte)の強調と表裏一体をなす。レッシングのこの思考が『人類の教育』(1780 年)や晩年の断片『キリストの宗教』につながってゆくのである。レッシングの思考は、当時の〈常識〉と緊張関係に立つものであった。

なお、ペールについて一言述べておくならば、彼における〈歴史的伝承への批判〉の背景には、彼独特の信仰絶対主義(フィデイズム)、そこからする正統的教義への苛烈な懐疑があり、〈有用性〉や〈常識〉の強調とは質を異にする。ニスベットが指摘するように、ペールはレッシングに生涯にわたる影響を与え、ペールの懐疑とライプニッツの理性が結びつくことによって、レッシング独自の動的な思考世界が形成されていると見ることができるのである^{iv}。

レッシングは、フリードリヒ・シュレーゲルやフィヒテをはじめ啓蒙以降の若い世代に大きな影響を与えた。そこにはヘーゲルも含まれる^v。『精神現象学』の「序文」における『賢者ナータン』第三幕・第六場でのナータンの台詞を踏まえた「真理とは[...]鑄造せられた貨幣ではない」という言葉は^{vi}、その証左である。ヘーゲルは、〈有用性〉、〈常識〉、ヴォルフ的な〈合理性〉を称揚したニコライの啓蒙の不毛さを批判したのであるが、レッシングもまたこのような観点からニコライを批判している^{vii}。啓蒙期の様々な動向を繊細に腑分けしながら、啓蒙とヘーゲルとの連続と不連続が問われるべきなのである。

三 ドイツにおける啓蒙研究——精神史パラダイムの相対化

レッシングを中心に述べてきたが、ここでドイツにおける啓蒙研究の現況を整理しておきたい。後述するように、研究の潮流は様々に分かれるが、それらに共有されているのは、精神史(Geistesgeschichte)における啓蒙観を過去のものとして相対化し批判する視点である。

精神史は、第一次世界大戦前後からファシズム期を経て、第二次世界大戦後の 1960 年代に至るまで支配的であったパラダイムである。ドイツ文学研究を中心とするパラダイムであるが、哲学にも強い影響を与えている。そこにおいては、〈西欧的なもの〉と〈ドイツの精神〉が対置され、前者に啓蒙、合理主義、感覚主義、功利主義、個人主義が、後者には、〈詩(Dichtung)〉の創造、非合理主義、〈共同体〉の創出が割り振られ、啓蒙はひたすら批判、否定の対象となる。ゲーテ、シラーを中心とするいわゆる〈ゲーテ時代〉のドイツの文学者・思想家、さらにはロマン派の営みが、〈ドイツ的〉精神の展開の過程とされ、彼らの〈詩〉によって〈西欧〉の浅薄な啓蒙が〈克服(überwinden)〉され、〈ドイツ的〉な国民精神の基礎が据えられることになったとされるのである^{viii}。

精神史の代表者として、ドイツ文学者のヘルマン・アウグスト・コルフ(1882～1963 年)、カール・フィーエター(1892～1951 年)、教育学者で哲学者のヘルマン・ノール(1879～1960 年)が挙げられる。なお、哲学者のディ

ルタイ(1833～1911 年)はこのパラダイムの成立にさまざまな関わりを持つが、啓蒙評価を異にしており、一律に論ずることはできない。また、カッシーラーにおいても精神史の概念は、彼の象徴形式の哲学のなかで独自の展開を遂げている。彼の『啓蒙主義の哲学』(1932 年)は、先のような啓蒙像を批判する位置にある労作である。

精神史は(ドイツ的)な国民精神の形成を高唱するものであるが、ナチスの世界観とは別物であり、第三帝国下での精神史の立場の文学史家、哲学者の運命は一様でない。ただし、現代における代表的な 18 世紀ドイツ文学研究者フォースカンプが「啓蒙をこのように国民的・国民主義的な歴史把握のコンテクストに横領することがどのような帰結をもたらしたかは、とりわけ第三帝国の時代に明らかとなった。啓蒙への敵意は、西欧啓蒙による〈過度の西欧化〉という表象に転化した。ヒトラー帝国における啓蒙研究は、野蛮な反ユダヤ主義と結びつき、学問の歴史と政治における、排除の伝統の持つ致命的な帰結を示している」と述べていることを指摘しておきたい^{ix}。

60 年代以降においては、啓蒙研究の新たな展開がなされている。シェーネルトはそれを(1)〈政治化(Politisierung)〉(60 年代半ば～70 年代半ば)、(2)〈社会学化(Soziologisierung)〉(70 年代半ば～80 年代半ば)、(3)〈歴史化(Historisierung)〉(80 年代半ば以降)の三つの局面に分けている^x。

〈政治化〉は、18 世紀ドイツの文学や思想に、市民階級(Bürgertum)の立場からの政治批判や社会的現実からの解放を求める方向性を読み取ろうとするものである。〈詩〉は内面性のみに関わるとした精神史のパラダイムは崩され、フランス革命への否定的評価は覆される。この時期の代表的な研究書として、1960 年代の怒れる若者とゲーテのヴェルテルを重ね合わせた K. Scherpe, *Werther und Wertherwirkung. Zum Syndrom bürgerlicher Gesellschaftsordnung im 18. Jahrhundert*, Bad Homburg : Gehlen, 1970 がある。この研究動向の背景には、1968 年世代の学生運動だけでなく、当時の大統領ハイネマンが戦後の憲法体制はドイツ独自の根を持つのであり、今日の民主主義の先駆者を発掘することが重要であると強調していたことなど、戦後西ドイツ社会における政治文化の変動がある^{xi}。

なお、旧東ドイツにおいては、〈政治化〉に対応する啓蒙研究は、公式理論である〈遺産・理論(Erbe-Theorie)〉と抵触するという問題があり、主流にならなかった。フォースカンプは、旧東ドイツにおける啓蒙研究の中心はフランス啓蒙にあったとしている^{xii}。

シェーネルトは触れていないが、60 年代以降、18 世紀の文学者・思想家の受容史の研究も盛んになる。文学者・思想家の理解は固定したものではなく、歴史のなかで変動する。それを顧みることによって、現在の解釈者の視点を反省しようとするのが、その主旨である。レッシングに関する H. Steinmetz (Hg.), *Lessing - ein unpoetischer Dichter. Dokumente aus drei Jahrhunderten zur Wirkungsgeschichte Lessings in Deutschland*, Frankfurt a. M. /Bonn : Athenäum, 1969 がその例である。先に示した(a)ヘーゲルの啓蒙理解、(b)ヘーゲル研究者の啓蒙理解、(c)啓蒙研究の現段階における啓蒙理解という位相の差は、この受容史という視座によって主題化が可能となるのである。

〈政治化〉の段階の研究は過去のものとなったが、形を変えて F. C. Beiser, *Enlightenment, Revolution and Romanticism. The Genesis of Modern German Political Thought, 1790-1800*, Cambridge, Massachusetts/ London, England: Harvard University Press, 1992 に受け継がれていることを指摘しておきたい。バイザーの研究は「ドイツ思想は 18 世紀を通じて、そしてフランス革命においてさえも政治に無関心であったという、現在でも一般に行き渡っている見解」^{xiii}を反証しようとするものである。バイザーの研究には高い評価が与えられている。

〈社会学化〉は、18 世紀の文学・思想の展開を社会史との連関で考察しようとする視角である。啓蒙思想や 18 世紀文学の考察が、書籍出版、雑誌、手紙、喫茶店、サロン、読書会(Lesegesellschaft)、劇場などのコミュニケーションの媒体や場、また、これらの媒体や場のネットワークのなかに置かれた読者、観客や文学者・思想家の社会史的分析と結びつけてなされるようになる。この局面の嚆矢となった研究が、ハーバマスの『公共性の構造転換』(1962 年)である。同書は、王の権威や身分秩序を再現する従来の〈代表的具現の公共性

(repräsentative Öffentlichkeit)に代って、自由な議論によって形作られる〈市民的公共性[公共圏](bürgerliche Öffentlichkeit)〉が、多層的な形で18世紀ヨーロッパに成立したことを啓蒙の思想運動と連関させて描き出している。18世紀は、実利以外に社会的な繋がりを指向することのない〈個人主義〉の時代であったとする精神史の啓蒙像は覆される。他方で、〈政治化〉の段階で前提となっていた、ジャコバン独裁を市民階級の解放の頂点とする古典的な〈物語〉は相対化され、18世紀が現代に至る原点の時代として再評価されることになる。〈ドイツ的〉なものによる啓蒙の〈克服〉は問題とならなくなる。

〈歴史化〉は、18世紀を歴史的過去として距離を取って考察する視角であり、心性史、ジェンダー研究、新たなテキストの発掘などさまざまな潮流に細分化している。フーコーの影響を受けたディスクルス分析、伝統が解体するなかでの科学と文学における人間了解の転換を総合的に問う〈人間学史(Geschichte der Anthropologie)〉の視角がこれに含まれる。ディスクルス分析の視角からの研究として M. Luserke, *Die Bändigung der wilden Seele. Literatur und Leidenschaft in der Aufklärung*, Stuttgart/Weimar: Metzler, 1995、〈人間学史〉の視点からの研究として J. Heinz, *Wissen vom Menschen und Erzählen vom Einzelfall. Untersuchungen zum anthropologischen Roman der Spätaufklärung*, Berlin / New York: de Gruyter, 1996 がある。

現在は、これら三つの局面で提出された視角が混沌として並存している状況である。フォース坎ブはこの状況を踏まえて「今後の重要な研究領域」として「啓蒙におけるコミュニケーションの諸形態の体系的研究」を挙げ、第二の局面で示された視点がまだ十分には展開されていないとの判断を示している^{xiv}。

四 現代の啓蒙研究とヘーゲル美学講義

以上概観してきた現代ドイツにおける啓蒙研究の成果は、ヘーゲル美学講義に結実した芸術体験の解明に対していくつかの示唆を与える。

第一は〈社会学化〉の視角を切り開いたハーバマスである。彼は、1980年の講演「モデルネ——未完成のプロジェクト」において、19世紀半ばのボードレール(1821～67年)、19世紀から20世紀への世紀転換期のホーフマンスタール(1874～1929年)やクリムト(1862～1918年)などの芸術に用いられる〈モデルネ(近代)〉の概念を、芸術、科学、道徳を包括する概念に拡大して、その出発点を啓蒙に見ている^{xv}。この見方は、啓蒙とそれ以後の19世紀初頭のドイツの文学・哲学の間の断絶を強調する精神史のパラダイムを批判する〈社会学化〉の視点と軌を一にしており、啓蒙期の文学・芸術の特質の見直しを促すものである。また、美学という領域が18世紀に始まったことの意味の再考を促すものでもある^{xvi}。

ハーバマスは〈モデルネ〉における芸術理解の理論化をカントの『判断力批判』(1790年)に見て、カントの理論を「美はなんらかの事物の表象に附着しているだけであり[……]つまり、仮象という媒体(Medium)によってのみ、対象は美的な対象として知覚されうるわけです。対象は虚構的な対象となることによってのみ感官を触発し、それによって、客観化をめざす思考の概念装置や道徳的判断に捉え込まれないなんらかのものが表現にもたらされるということでもあります」とパラフレーズしている^{xvii}。美や芸術が、科学や道徳とは区別される独自の領域として自律化するということであるが、それは、近代社会のなかで抑圧されているもの、主題化されていないものを虚構によって露わにして提示する機能を芸術が担うようになったということでもある。

このような意味での芸術がヘーゲルの美学講義とどのように関係するかについては慎重な検討が必要である。だがヘーゲル美学講義における、いわゆる「芸術終焉論」に関して、小田部胤久の次のような指摘があることに注意を促しておきたい。——小田部は、ヘーゲル美学講義のなかの「芸術は、一定の範囲の内容や[その内容の]捉え方に固く制約されていた状態から抜け出て、人間的なもの(Humanus)——すなわち、人間の心情の深みと高み、人間の喜びや悩みにおける、あるいは人間の努力や行為や運命における普遍的人間性——を自らにとっての新たな聖域とする。[……][ここで表現される]内容は、芸術にとって絶対的に規定されたものではない。内容とその形態を決定することは、[芸術家の]意志的な創意に委ねられている[……]」という言葉

引いて、「芸術は、絶対者の表現という課題を過去のものとすることで、はじめて〈芸術としての芸術〉になるといい。すなわち、今日の目から見るならば、ヘーゲルの「芸術終焉論」は、逆説的にも、宗教から自律した近代芸術の誕生を証しているのである(ちなみにこのことは、「芸術のための芸術」という観念が19世紀初頭に成立したことに符合する)」と述べる^{xviii}。

この指摘に従うならば、芸術の自律化を媒介項としてヘーゲルとカントの連続面が浮かび上がることになる。〈モデルネ〉における芸術の自律化、それに伴う芸術の社会的機能の変化を踏まえてヘーゲルの芸術体験と美学講義を照射する手がかりが与えられるように思われるのである。

第二は初期ロマン派の問題である。精神史のパラダイムへの批判は、啓蒙のみならず初期ロマン派の見直しも促すこととなった。「反啓蒙」という使い古されたレッテルを取り去って、初期ロマン派のテキストの再検討がなされ、啓蒙との連続面が炙り出されている^{xix}。

例えば、フリードリヒ・シュレーゲル(1772～1829年)である。彼は、1797年から1804年にかけて一連のレッシング論を書き、レッシング選集も刊行している。シュレーゲルは、1797年の「レッシングについて」のなかで戯曲『エミーリア・ガロッティ』(1772年)を「純粹知性の傑作」ではあっても「詩的知性」を欠いた「演劇的代数学」とであると断じて後世の評価に大きな影響を与えたことで知られる。だが、シュレーゲルの意図はレッシングを貶めることにあるのではなく、彼の本領が「機知」や「暗示と示唆」に富んだ「断片」としてのあり方によって読者の自立的な思考を促す独特な「対話的」な散文にあることを示すことにある。このような観点からシュレーゲルは、レッシングの書簡、『ハンブルク演劇論』、ライマスの遺稿刊行をきっかけとする論争のなかで書かれた『寓話』(1778年)、対話編『エルンストとファルク』(1778、80年)、『人類の教育』とりわけ『賢者ナータン』を高く評価し、『ナータン』を真に理解する者は、レッシングを知っている」と述べるのである^{xx}。

「機知」や「断片」に着目するシュレーゲルのレッシング論が、シュレーゲル自身の方向性を色濃く投影したものであることは否めない。だがそれは、「認識の酵母(Fermanta cognitionis)」を振り撒くことによって読者の「自立的思考(selbst zu denken)」を促そうとする(『ハンブルク演劇論』第95篇)レッシングの散文、多声的な言葉の空間によって観客・読者に問いかけを行なう彼の劇作品の特質を言い当てるものでもある。レッシングの文体、テキストの開放性、読者に着目したシュレーゲルの議論は、啓蒙期のテキストを初期ロマン派、さらには現代に架橋する手がかりを与えるものと言わなければならない。

新たな初期ロマン派認識に立つて、ヘーゲルと初期ロマン派の関係、また初期ロマン派とも密接に関係するヘーゲルの芸術体験の内実を捉えなおすことが求められていると思うのである。

第三は(歴史化)の視角との関係である。この視角は、啓蒙期において成立した文学、学問、制度を我々にとって自明のものとし、歴史的に距離を取って考察を加え、それらの問題点を洗い出そうとするものである。このような角度から、芸術体験が生ずる場としての美術館という制度を歴史的に相対化して批判的に考察する研究がなされている^{xxi}。他方で、ハーバマスが市民的〈公共圏〉を肯定する立場から、自律化した芸術の存立の条件の一つとして、「芸術制作と芸術鑑賞の制度化[……]つまり、芸術制作が市場に依拠した形で制度化されるということ[……]、さらには、芸術鑑賞が実生活上の目的から自由なものとして、批評によって橋渡しされながら制度化されること」^{xxii}を挙げていることにも注意が払われなければならない。芸術と〈公共圏〉を結ぶものとしての制度である。これら二つの視角を踏まえながらヘーゲルの芸術体験、美学講義と制度としての美術館の関係を問うことが求められている。

五 ゲートマン-ジューフェルトのヘーゲル美学論

最後に、現代におけるヘーゲル美学講義の代表的な研究者であるゲートマン-ジューフェルトのヘーゲル美学講義についての論文「ダントーとヘーゲルの芸術終焉論—芸術と芸術理論の近代性をめぐる争い」^{xxiii}を紹介し、以上18世紀研究の立場から述べてきたこととの接点を探ってみたい。

ジーフェルトの基本視点は、ヘーゲル美学を〈モデルネ〉の理論と捉えることにある。〈モデルネ〉は啓蒙に始まるものであり、「ヘーゲルの美学はその全体系の構成において、啓蒙の理性のプロジェクトに基づく」(18)とする。啓蒙のプロジェクトを前提とする点でジーフェルトはハーバマスと視点を共有している。ハーバマスが芸術におけるアヴェンギャルドを評価するのに対して、ジーフェルトはそれに批判的な距離を取るが、芸術に現代社会における批判的機能を見いだす点で両者は視点を共有している。

ジーフェルトの論文は、ヘーゲル美学に対するこのような理解に立つてその現代的意義を論じるものであるが、その際の論敵として二つのものを念頭に置いている。ひとつはポスト・モダンのヘーゲルに対するスタンスであり、もうひとつは、ヘーゲルの「芸術終焉論」をめぐるダントーの議論である。

ポスト・モダンにおいては、啓蒙における理性のプロジェクトに対する懐疑が支配し、哲学的思考が合理性から離れ、観念連合的な遊戯の実験の場となっている、と指摘する。哲学は、可能的なものとの戯れとなり、一種の芸術と化している。理論としてのヘーゲル美学は、この戯れという仕事にあたかも事柄や理論が含まれているかに見せるための引き立て役になり下がっている、とする(19)。

ダントーにおいてはヘーゲル美学が現代的意義を伴って再生されているとジーフェルトは見る。だが、ダントーの芸術理解がヘーゲル美学の再生の方向を誤らせているとするのである。

ダントーは、ヘーゲルの「芸術終焉論」を現代に当てはめる。自然の模倣として始まった芸術は、ポップ・アートの登場によって、日常の事物と芸術の区別が解消する段階に至った。この段階において「芸術の終焉」が成就したとするのである。芸術作品はもはや外的に知覚可能な特徴によって芸術として判別することが不可能となる。むしろ、作品が作品であるために重要なのは「表題」に凝縮されるその意義であり、これを判別できるのは、現代芸術の本質を知悉する哲学者や専門家のみとなる。この意味において、日常の事物と芸術の区別の解消は、芸術の哲学への解消(揚棄)でもある(22f.)。こうした状況をジーフェルトはいささか皮肉を込めて「哲学による芸術の禁治産宣告」と呼んでいる(24)。芸術の自律化の果てにおいて、芸術は自律性を失い、専門家・哲学者の判別のみに委ねられて美術館の奥に収容されてゆく。芸術は日常世界との接点を失い、「もはや人間の文化の一部ではなくなった」(26)とするのである。

ジーフェルトは、ダントーのヘーゲル解釈を誤りとして斥ける。ヘーゲルにおいて芸術は、自然の模倣でも芸術家の内面の表現でもない。芸術はむしろ、文化共同体に対して有意義な世界解釈、行為の方向付けを提示するものであり(33)、ヘーゲルの体系内部において芸術は、「客観的精神の人倫への移行」に位置するのである(30)。芸術は、かつてのギリシア世界におけるような直観的に確証可能な最終的な行為の方向付けを与えるものではない。その意味において「芸術の終焉」を語ることは妥当であるが、このことは、芸術がダントーの意味で「終焉」を迎えることを意味しない。現在と過去の芸術は、様々な世界解釈や行為の方向付けを我々に提示し、それらとの対話的な対決を我々に迫る。ヘーゲルが継承する啓蒙のプロジェクトは、「理性と自由に基礎を置く、人間にふさわしい世界の実現」(36)の要求である。芸術はそのような方向への反省を促すものであり、ジーフェルトはこのことをカント『判断力批判』における概念を借りて、芸術を「人倫性の象徴」と捉える(32f.)。ヘーゲルが目指すのは、専門家による美術館への芸術の隔離ではなく、反省、対話、対決の媒体としてのこのような芸術を日常世界に取り戻すことである。――

六 むすびにかえて

「哲学による芸術の禁治産宣告」をキーワードとするジーフェルトの前衛芸術理解が当たっているか、また、ジーフェルトのヘーゲル解釈がヘーゲル内在的な観点から見て妥当であるかは別途の検討に委ねられなければならない。ここでは、18世紀研究の観点から述べてきたこととの接点を確認することで結びにかえたい。

ジーフェルトにおいては、見てきたように啓蒙とヘーゲル美学との連続性が強調されている。ヘーゲルは啓蒙の〈克服〉者ではなく、啓蒙のプロジェクトの継承者である。芸術の意義を日常世界との連関のなかに取り戻

そうとするジューフェルトの視点は、啓蒙研究の〈社会学化〉の段階で提起された読者、観客の問題と重なり合っている。その際に、ジューフェルトにおける日常世界の強調が、芸術の日常世界への解消を意味するものではなく、芸術が日常世界を揺さぶり、人々の反省を促す媒体とされていることが注意されなければならない。これはハーバマスが啓蒙以降の芸術に見いだした批判的機能に対応する。また、反省を促す媒体としての芸術という問題は、レッシングやフリードリヒ・シュレーゲルのテキストの特質に関連するものでもある。

ジューフェルトがヘーゲル美学をカント『判断力批判』第 59 節の「人倫性の象徴としての美」と関連付ける際に「自然美」の問題をネグレクトしているなど、詳細な点における詰めはさらに必要と思われる。だが、ヘーゲル美学を〈モデルネ〉の理論と捉えるジューフェルトの立論は、現代における啓蒙研究の成果を基礎としている。啓蒙を平板な〈合理性〉と〈有用性〉にとらわれた〈常識〉の思想として切り捨てることは、もはや学術的妥当性を持たないのである。

-
- i 笠原賢介「評論二 啓蒙の弁証法の「定め」と行方」、『ヘーゲル哲学研究』20 号、2014 年。この論文は、栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』、未来社、2011 年への論評である。
 - ii Jørgensen, Sven Aage, Klaus Bohnen, Per Øhrgaard: *Geschichte der deutschen Literatur Bd. VI Aufklärung, Sturm und Drang, frühe Klassik 1740-1789*, München: Beck, 1990, S. 15ff.
 - iii 『カルダーヌス弁護』と『賢者ナータン』については、拙著『ドイツ啓蒙と非ヨーロッパ世界——クニッゲ、レッシング、ヘルダー』、未来社、2017 年、128 頁以下、『ハンプルク演劇論』については 278 頁以下を参照。
 - iv Nisbet, Hugh B.: Lessing and Pierre Bayle, in: Ch. Ph. Magill (Hg.), *Tradition and Creation. Essays in Honour of Elisabeth Mary Wilkinson*, Leeds: W. S. Maney & Son, 1978, S. 13ff.
 - v Köpke, Wurf: Der späte Lessing und die junge Generation, in: E. Bahr u. a. (Hgg.), *Humanität und Dialog: Lessing und Mendelssohn in neuer Sicht. Beiheft zum Lessing Yearbook*, Detroit/ München: Wayne University Press/ edition text+kritik, 1982.
 - vi ヘーゲル(金子武蔵訳)『精神の現象学』上巻、岩波書店、1971 年、36 頁。
 - vii Nisbet, Hugh B.: *Lessing. Eine Biographie*, München: Beck, 2008, S. 830f.
 - viii Dainat, Holger: Die wichtigste aller Epochen: Geistesgeschichtliche Aufklärungsforschung, in: H. Dainat u. W. Voßkamp (Hgg.), *Aufklärungsforschung in Deutschland*, Heidelberg: Winter, 1999, S. 21ff.
 - ix Voßkamp, Wilhelm: Aufklärungsforschung in Deutschland. Einleitung, in: H. Dainat u. W. Voßkamp (Hgg.), a. a. O., S. 3.
 - x Schönert, Jörg: Konstellationen und Entwicklungen der germanistischen Forschung zur Aufklärung seit 1960, in: H. Dainat u. W. Voßkamp (Hgg.), a. a. O., S. 39ff.
 - xi Vgl. Schlott, Michael: „Politische Aufklärung“ durch wissenschaftliche „Koppulungsmanöver“. Germanistische Literaturwissenschaft und geschichtswissenschaftliche Jakobinerforschung zwischen 1965 und 1990, in: H. Dainat u. W. Voßkamp (Hgg.), a. a. O., S. 79ff., bes. S. 88.
 - xii Voßkamp, a. a. O., S. 3f.
 - xiii Beiser, Frederick C.: *Enlightenment, Revolution, and Romanticism. The Genesis of Modern German Political Thought, 1790-1800*, Cambridge, Massachusetts/ London, England, 1992, S. viii. バイザー(杉田孝夫訳)『啓蒙・革命・ロマン主義 近代ドイツ思想の起源 1790-1800』、法政大学出版局、2010 年、iv 頁。
 - xiv Voßkamp, a. a. O., S. 6.
 - xv Habermas, Jürgen: Die Moderne –ein unvollendetes Projekt, in: J. Habermas, *Kleine Politische Schriften (I-IV)*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1981, S. 444ff. ハーバマス(三島憲一訳)「近代——未完成のプロジェクト」、『思想』696 号、1982 年 6 月。〈モデルネ〉については次も参照。Jauß, Hans Robert: Literarische Tradition und gegenwärtiges Bewußtsein der Modernität, in: H. R. Jauß, *Literaturgeschichte als Provokation*, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1979, S. 11ff.
 - xvi 啓蒙期の美学については次を参照。Cassirer, Ernst: *Die Philosophie der Aufklärung*, Tübingen: Mohr, 1973, S. 368ff.
 - xvii Habermas, a. a. O., S. 455ff. ハーバマス前掲邦訳、99 頁。
 - xviii 小田部胤久『西洋美学史』、東京大学出版会、2009 年、199 頁以下。
 - xix この点については次を参照。Pikulik, Lothar: *Frühromantik. Epoche –Werke –Wirkung*, München: Beck, 1992, S. 20ff.

-
- ^{xx} Schlegel, Friedrich: Über Lessing, in: *Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe Bd.2*, Paderborn: Schöningh, 1967, S. 100ff. シュレーゲルのレッシング論については、拙論「レッシングとフリードリヒ・シュレーゲル—オリエン特観をめぐって」、『シェリング年報』25 号、2017 年も参照。
- ^{xxi} 例えば、ダンカン(川口幸也訳)『美術館という幻想 儀礼と権力』、水声社、2011 年。
- ^{xxii} Habermas, a. a. O., S. 456. ハーバマス前掲邦訳、99 頁。
- ^{xxiii} Gethmann-Siefert, Annemarie: Danto und Hegel zum Ende der Kunst – Ein Wettstreit um die Modernität der Kunst und Kunsttheorie, in: A. Gethmann-Siefert u. a. (Hgg.), *Hegels Ästhetik als Theorie der Moderne*, Berlin: Akademie, 2013, S. 17ff. 以下、引用頁数は本文中にアラビア数字で示す。